

欧州の日本研究において、最近特筆すべき事業展開を見せているのが、ストラスブール大学の日本研究学科とコルマルに位置するアルザス・ヨーロッパ日本研究所(CEEJA)だろう。両者の共催で近頃「第3回日本研究集会」が開催された。主題は「日本と欧州との出会い：発見の諸相」(2005年12月8-11日)。美術から女性論、民俗学から哲学、美学から文学を跨ぎ、南蛮時代の思想対決から仏教学や国学におけるキリスト教批判、さらには幕府の「和蘭風説書」の命運から琉球を含む幕末外交史、明治憲法から竹内好までを射程に収める多方面な発表をここに要約するのは、無理な相談だ。

開会の講演では、東大の三浦篤さんが、ラファエル・コランと日本人洋画家たちの交流を、一次資料を駆使して描き出した。閉会講演では東洋語学校のフランソワ・マセさんが平田篤胤の『本教外編』に言及し、平田国学の神学的構造がキリスト教との対峙のなかに形成されたとの村岡典嗣以来の学説を確認し、それがさらに近代の神道理論家いかに引き継がれていったかを、これまた新資料を発掘して詳述した。磯田光一

連載 86
アルザスの日本研究
 最近の研究集会「日本と欧州との出会い」から

の『鹿鳴館の系譜』にもまして、借り物から独自の体系を構築する姿勢が、神道と呼ばれる伝統の、古来一貫した姿らしい。

おりからストラスブールはクリスマスの装飾が夜空に点灯され、大聖堂前の広場には夜店が立ち並ぶ。大学本部の宮殿はそこから歩いて数分の位置。ご自慢の路面電車も市街を滑るようには行き来する。車内で闊達に会話する学生たちもまことに国際色豊か。そのなかでいまや日本語は外国語としては英語に次いで2位の受講者数を誇るという。その背景には後援の上部ライン県参事会およびアルザス地方と日本企業との長年にわたる協力関係がある。隣町のコルマルでは、近郊のキンスハイムで近年まで成城学園が高等学校を運営し、地域社会と日本との交流に尽力してきた。その寄宿寮を含む施設を、成城学園の撤退後も是非日本の学術・教育機関に利用し続けてもらいたい、というのがアルザス側の意向だが、日本側は行政改革その他の動きもあって、なお対応が流動的だ。CEEJAの本拠であり、今回も会期後半の会場となったコルマル市内のキーナー城の敷地には、80名程度の会議の設定にまこ

とに理想的な設備がある。だがここは一旦閉鎖の上、まもなくお城本体の改修工事に取り掛かる予定と聞く。私見としては、アルザス側研究者の企画力、地方政府からの経済的な支援を活用しつつ、適切な話題に応じて臨機応変に日本側共催の研究会を開催することが、欧州・日本両者の利害にとって最良の選択ではないかと推測される。

今回の会議も、地元関係者の水際立った連携によって可能となった。ブラジル出身のサカエ・ムラカミ＝ジルー教授が日本各地はもとより、ヴェネチア大学、ヴューン大学、ハイデルベルク大学などを自ら精力的に回って、有力な研究者の発表同意を取り付け、現地でのロジスティックにはアントナン・ベシュレール講師が鮮やかな手腕を見せた。その背後で、地方政府との交渉には、研究所所長アンドレ・クライン氏が、黒衣に徹しつつも、その経験を見事に生かしている。もともとこの研究所初代所長には、パリ大学東洋語学校を退職のジャン＝ジャック・オリガス教授の就任が内定していた。だが多くの人々が惜しんだその早すぎる死去に伴い、クライン氏がその責を塞いでいる。

CEEJAの受付にはオリガス氏の写真が、故人の人柄のまま、飾らず謙虚に掲げられていた。帰国前日、パリ郊外、キンシー・スー・セナールのオリガス氏の墓に、光子未亡人に付き添われて参上し、会議の成功をご報告した。これらのアルザスでの日本研究は、関係者数人の献身的な努力によって奇跡的に成立している。その運営振りを見るにつけ、将来の発展になにとぞお力添えをと、祈らずにはいられない。日本側としての持続的な支援も大切な課題となろう。

*Cahiers du Centre européen d'Études japonaise d'Alsace, No1(2004)Château Kiener, 24 rue de Verdun, 68000, ColmarのほかRevue d'Études japonaises du CEEJAがPresses orientalistes de France, 2005より出版されている。Actes du Deuxième Colloque d'études japonaises de l'Université Marc Bloch(28-30 mars 2003)につづき、本会議の報告書も追って編集・出版の予定。またジャン＝ジャック・オリガスの日本語業績に関しては『物と眼——明治文学論集』(岩波書店、2003年、芳賀徹解説)がまとめられている。

2006. 01. 28.
 No 2759
 図 38711

国際日本文化研究センター研究員・
 総合研究大学院大学教授
稲賀繁美